



神戸大学「震災文庫」過去と現在、そして未来

中山, 貴弘
益本, 禎朗
渡邊, 隆弘

(Citation)

アリーナ, 9:88-95

(Issue Date)

2010-07-15

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001198>



特集

地震の表象——濃尾震災の再検討

神戸大学「震災文庫」

過去と現在、そして未来

ARENA

2010

中山貴弘

●神戸大学附属図書館司書

益本禎朗

●神戸大学附属図書館司書

渡邊隆弘

●帝塚山学院大学人間科学部准教授

1. はじめに

本稿は、阪神・淡路大震災（一九九五年一月一七日）に関する資料の網羅的収集を目的とした、神戸大学附属図書館の「震災文庫」について

考察を行うものである。この文庫については書籍や多数の論文・記事が既に発表されており、^①一般的な紹介をここで繰り返すことはなるべく避けたいと筆者達は考えた。従って、資料収集や保存公開方法については詳述せず、それよりも個人的な意見や想いを盛り込むことに重点を置いた。

とはいえ、設立からの経緯と現状をある程度紹介することも必要であるため、まず第二節では震災文庫について概観する。続く第三節では震



神戸大学国際・教養系図書室の被害状況

災を体験した図書館司書である筆者の経験談とともに、資料提供者へのインタビューを元に、資料を提供した者、収集した者の想いについて考察する。そして第四節では、震災文庫が保存すべき記憶の未来について意見を述べる。^②

2. 震災文庫の概観

2-1 立ち上げから今日まで

震災文庫の立ち上げから公開・運営などの記録は、稲葉（二〇〇五）に詳しい。震災の冬が終わって春を迎えた一九九五年五月に、稲葉氏（当時・資料受人担当の係長）を中心とする震災資料収集活動が本格的にはじまり、同年一〇月三〇日に約一〇〇〇点の資料を図書館の一角に集めて公開開始となった。資料情報が検索できるウェブサイトも同時にオープンしている。

その後は資料数を着実に増やし、収集資料数が三万を超えた二〇〇四年秋に独立スペースを持つにいたる。また同年、震災一〇周年を迎える企画として「資料でたどる阪神・淡路大震災の記録と記憶」と題した展

示会^③およびこれに連動した講演会を開催した。これは、研究者や学生のみならず特に多数の地元市民の参加により、図書館の展示会としては異例な、熱気を帯びたものとなった。その後も地道な収集活動を継続した結果、二〇一〇年四月現在では収集資料数約四万五〇〇〇件というひとかどの「文庫」となっている。

リアルな文庫と並行して、デジタルアーカイブの構築・運用も活動の柱となっている。収集全資料が原則として記事単位で検索できる検索システムを構築し、また二〇一〇年四月現在、約四八〇〇〇件の多様な資料を著作権者の許諾のもとにデジタル化・公開している。

2-2 網羅的収集と情報公開

震災文庫活動には、発足当初から「三大方針」ともいべきものがあつた。公開できるならどのような断片的資料でも集める「網羅的収集」、大学構成員や研究者の閲覧に限らない「一般公開」、時間的・空間的制約を打破する「インターネットの最大限利用」である。特に資料の網羅的収集は方針の中核であり、市販の図書・雑誌にとどまらず、各種報告書、パンフレット、レジュメ類、チラシ、ポスター、写真、ビデオなどあらゆる資料を当初から扱ってきた。必然的に購入資料の割合はわずかで、発行者・関係者から頂戴した非売品が大半を占めることとなる。であれば、集めた資料を学内に囲い込まず、誰にでも平等に資料・情報提供を行うのも当然のこととなる。

多くの大学図書館がいわゆる「特殊コレクション」を維持管理しているが、震災文庫のように現代資料をリアルタイムに収集して形成しているコレクションはほとんど例がない。収集・組織化・保存といった各局面で、従来の図書館によるコレクション構築の経験を活用できない要素が多々あり、細かな試行錯誤を積み重ねながら構築を進めてきた。

例えば収集活動においては、通常の出版流通ルートで対処できる部分はほとんどない。大半を占める寄贈は座してなされるものではなく、資

料の存在・発生の把握（出版流通情報に頼れない）、資料発生源とのコンタクト（連絡先調査を行い、寄贈依頼）、文庫活動への認知を高める広報活動など、さまざまなアンテナを持った能動的な活動が必須である。また、詳細は省略するが、組織化、保存の局面においても、多様な資料のそれぞれに対応した措置が必要である。資料の多様化というと「マルチメディア」に目が向くが、むしろ問題が大きいのはレジュメ、チラシ、ポスターなど紙媒体の非図書資料である。わが国の大学図書館では経験の蓄積が乏しいため、文書館や地域資料を収集している公共図書館の手法を参照しつつ、独自のファイリング方法を考案してきた。

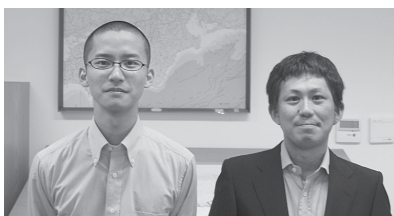
またインターネットの活用については、一九九五年がちょうど日本におけるインターネット元年ともいべき年であつたことが注目すべき点である。まだ水道・ガス等の復旧も不十分な段階からボランティア達が通信手段としてメーリングリストを使用しているのを目の当たりにしたことは、記憶にあたらしい。本学でもその前年からホームページを運用しはじめたところであつたため、収集開始時点、つまり文庫としてオープンする前から、収集資料の目録一覧を「収書速報」としてウェブ公開してきた。さらに神戸大学附属図書館の被害状況の写真をいち早く電子画像化しウェブ公開している。その後徐々にデータ範囲を拡充していったが、一九九九年の「神戸大学電子図書館システム」運用開始にあたり、本学図書館の特色ある事業として震災文庫の資料を電子化公開することが重点課題のひとつとされ、デジタルアーカイブ構築が急速に進むこととなった。

2-3 「無謀」と「愚直」

先述の通り一五年の時を経て、震災文庫の資料は四万五〇〇〇点を超えるにいたつた。この間、新館への移設と、それにあわせた展示会、そしてデジタルアーカイブの成長を除くと、開設後にそれほど顕著なメルクマールはなく、また運営方針の見直しや転換も行われていない。網羅



わたなべ・たかひろ◎一九八五年から二〇〇六年三月まで神戸大学附属図書館に勤務。震災文庫及び震災文庫デジタルアーカイブの立ち上げに関わった。その後教員に転じ、帝塚山学院大学人間科学部准教授として司書養成教育等に携わっている。専門は情報組織化論。



なかやま・たかひろ◎一九九〇年より神戸大学附属図書館に勤務。目録、システム管理、利用サービスを担当した後、現在は電子図書館係長としてデジタルアーカイブを運用している。

ますもと・よしろう◎二〇〇九年より神戸大学附属図書館に勤務。情報サービス係で利用サービスを担当している。震災文庫のサービス・収集業務にも携わる。

的収集などの方針を維持して、地道・愚直に資料収集を続けてきたといえよう。

もつとも、「網羅的」収集が方針通り十全に果たされているわけではない。前述のように収集活動には能動性が求められており、その活動能力（人的資源）が収集数を左右している。経年統計を見ると各年の新規受入資料数は比較的安定しているが、これは震災資料発生の安定性ではなく、我々の収集能力の限界点を示す数字と見るべきである。

新たな資料収集の方法としては、例えば建築学、地理学、アーカイブズ学などさまざまな分野から災害の問題にアプローチしている神戸大学内の研究者たちに、資料提供や資料の選定などを通じて、定期的に震災文庫に関わってもらえるよう働きかけるのもよい試みだと考えられる。

さらに、選書や資料提供だけでなく、それらを利用して行われた研究の成果物（論文）まで含めた資料収集につながられるならば、「資料収集の連鎖反応」が起ころであらう。

そもそも活動の当初から、どの程度の資料が出されて我々の能力ではどれだけ集められるのか、何年経てばどの程度まで文庫は成長するのか、といった見通しがあつたわけではない。正直なところ、小規模な図書館一

つ分にも匹敵する資料数になろうとは、思わなかった。今考えると、「網羅的」という方針を掲げることは、ずいぶん無謀なことであつたといえよう。しかしながら一方で、（やや誤解を招く表現かもしれないが）最初の「無謀」さと、その無謀さが明らかにした後も旗を降ろすことなく、できる範囲で営々と収集を続けてきた「愚直」さが今日の震災文庫を育ててきたと、当初から関わってきた筆者（渡邊）は考えている。

3. 記録と記憶：被災者の想い、収集者の想い

3-1 「震前」と「震後」

ところで神戸大学には「新聞記事文庫」という、明治末から昭和半ばまでの多種にわたる新聞から主に経済関係の記事を切り抜き、主題別の切り抜き帳約三二〇〇巻にまとめたコレクションがある（経済経営研究



震災文庫展示会（2004）の会場風景

所蔵)。神戸大学附属図書館ではこれを電子化する作業を行っているのだが、大正末から昭和はじめにかけての記事には、テーマに関わらず関東大震災に言及したものが少なくない。

そんな記事の電子版校正を行っていて目についたのが「震前」「震後」ということばである。⁴当時の新聞から察するに、首都を壊滅させた関東大震災の影響はまさに社会・経済体制をゆるがしかねない大事件と捉えられており、これを機に経済活動の中心が関西に移るとの観測記事もみられた。⁵その影響を指して「震前」「震後」という呼称が出てきたのは納得できるところである。

一方、阪神・淡路大震災については、このような表現を聞いたことがなかった。どうやら学術や行政の用語で、地震動の前後をこのように呼ぶようではある。しかし一九九五年の震災について、この「震前」「震後」という表現は、まさに自分の実感にぴたりくるニュアンスを持っており、非常に印象深いことばである。何かを思い出す時には「あれは確か震災の前だった」などと考えるのが習慣になっている。ネットですんなくことを書いてみたら、即座に、自分もそうだという反応が複数あった。体験した者にとって、文字通り人生を画する出来事だったのである。

3-2 個人的な「震前」「震後」

「その」前日、一九九五年一月一六日は月曜日だった。筆者（中山——神戸に生まれ育ち、地震の当日まで長田に居住）がそんなことを覚えていてるのは、当時は成人の日だった一月一五日が日曜日で、その振替休日として一六日が休みだったからである。めずらしく職場の先輩の家に遊びに行つて、結構遅くなつてから家に帰り、あした仕事に行くのは嫌だなあと不機嫌になりながら寝た。翌朝、本当に仕事に行けなくなつたことを知り、何か罪悪感を持ったことを覚えていてる。

そして筆者の「震後」はその後一年くらい茫漠としている。地震の翌



地震発生直後の自宅ベランダから南西方向距離200メートルの猛火を見る（撮影・キャプション：谷通好、震災文庫デジタルアーカイブより）

識に涙が出てきたこと。三月になつて伊丹に引越したら駅が仮営業だったこと。そんなことをたまに断片的に、夢のように思い出すのだ。

このような個人的な事を書き並べたのには理由がある。震災文庫の資料に触れた時に思い出すのが、まさにこの茫漠としていた時期の記憶だからだ。普段は自分では何もなかったことになっている。しかし震災文庫に関わる仕事をしていると、何かのはずみに、その、なかったはずの記憶がよみがえるのである。仕事でゆえ、ちよつと困つてしまうこともあるのだが。

そして震災文庫の資料がそんな記憶をよみがえらせるのは、ただ資料が自分の経験を思い出させるだけではなくて、資料の提供者や文庫を構築してきた人達の想いに強く動かされるせいだと思つていてる。

朝、テレビから、昔よく聞き知った高校時代の同級生の声がして目覚めたこと。（アナウンサーになつていたので）。病氣になつてしまった妻を実家に帰らせたこと（しかし一体どうやって？）。自転車での通勤の行き帰り、瓦礫になった自宅から取り出せるものを拾つてはポケットを一杯にしたこと。自分の住んでいた辺りのあちこちから火煙が出ていたのを見て、無意

3-3 資料収集者の想い

そもそも震災文庫の収集を後から考えてみても、そこには収集担当者の想いを感じざるを得ない。図書館としてはある意味前代未聞の、図書や雑誌のみならずチラシ、貼り紙、プレスリリースといったものまで資料として収集するという行為を決心した過程については、稲葉（二〇〇五）にも必ずしもくわしくは触れられていないのだが、お役所仕事の考え方では到底できなかった仕事だと思わずにはおれない。

完全に図書館的な考え方で資料を整理したこと、つまり主題別に一点一点に分類番号をつけ、それぞれの形態別に整理保存しているため、アーカイブズ学でいうところの出所原則や原秩序尊重原則にのっとっていないことは、時に批判される事もある。それでもなお、人的ネットワークやマスメディアへの広報など可能な限りの様々な手段を使って、図書館という立場で出来る限りのやり方で、収集・構築されてきた震災文庫が圧倒的な力を持った資料群となっている事実は、実際に見た人ならば誰も否定できないだろう。

3-4 資料提供者の想い

これは図書館としては例外的なことなのだと思うが、資料提供者の方々から、本当に強い想いを直接感じることが多い。例えば写真やビデオ映像をはじめ多くの資料を提供して下さっている谷通好さん⁽⁶⁾。谷さんは地震発生の直後から被害状況を撮影し、またアマチュア無線を駆使して住民の安否や必要物品の情報を中継するボランティアを行ってきた人である。また当時の経験を生かし、行政の危機管理室などとも連携しつつ、現在においても無線仲間と自主的な防災訓練を行っているとのことだ。

先日、来学された谷さんにしばらくお話を伺う機会を得たので、前々から聞いてみたかったことを質問した。なぜ記録を保存しようと思った

かということである。すると即座に「未曾有のできごとだと直感し、記録を残さないといけないと思った」と返答があった⁽⁷⁾。「後から振り返ると震災は自分の体験した三つの大きな出来事のひとつである。一つ目は神戸の水害（昭和十三（一九三八）年）。自宅に直接の被害はなかったが、三宮の道が川になったのを覚えている。二つ目は数度の神戸大空襲（昭和二〇（一九四五）年）で、五人の家族を失った。三つ目が阪神大震災で、被災地を見ると爆撃に遭った神戸を思い出した」とのことであつた。

筆者が驚いたのは、昭和五（一九三〇）年生まれの谷さんが、震災を水害および戦争とならぶ人生の画期として捉えていたことだ。実は神戸で生まれ育った筆者は、子供のころ祖母や親戚たちから神戸の水害と戦争の話をよく聞かされていたので、そのお話にある種の懐かしさを感じて聞きいりながら、同時に自分もまた震災をそれらの災害と同列に考えていたことに気づいて、世代を超えた記憶の共有ともいえるべき現象に驚いたのである。

谷さんは最後にひとつ興味深いお話をつけ加えた。孫たちに戦争の話をしてあまり熱心に聞いてはくれないのだが、高校の寮で独り暮らしをするようになって心細がっている孫に「自分がそれぐらいの歳の時は



長田区・大正筋商店街（撮影：和田幹司、震災文庫デジタルアーカイブより）

もう軍隊に入って親元を離れていた」と言うと、戦争や軍隊ということの持つ意味がひとつ実感できたようだった、というのである。

このお話を伺った時に「防災教育」とか「記憶を風化させない」といったことばの意味もまた見えてきたような気がした。つまり、日頃から災害の記録に触れ、体験者の話を見聞きしたことは、いつかある日、何か違う局面で実感を持つて理解されるかもしれない。その時に記憶や体験は「共有された」ということができるのではないか。人の体験というものはそのようにして伝わってきたのではないか。筆者が一九九五年、瓦礫の神戸に見たものは（もちろん見たことがないはずの）空襲を受けた神戸の姿だった。

3-5 想いをつなぐのが図書館？

図書館の役割を理念的に考えると、資料を作った人の想いがあつて、それを利用者へとつなぐ事である、と言うことも実は可能なかもしれない。例えば文章を執筆するという行為があつて、それを出版するという行為があり、さらに図書館はその出版物を所蔵することによって、利用者に資料作成者の想いをつなげているのだと、「図書館」という仕組みについて規定してもいいのではないだろうか。そして、その伝達作用は時間と空間を超えて超世代的に行われるということが、図書館活動の特徴である。

このことを日常的に痛切に実感させてくれるのが、震災文庫である。資料作成者がイコール提供者であるような資料を大量に持ち、その資料作成・提供者と司書が直接にお話をするというようなことは、通常の図書館活動においてはほとんど見られないことだからである。その資料提供者の想いをどのように保存し、現在の、また未来の利用者につなげて行くかということが、これからの震災文庫の課題なのだろう。

4. 震災文庫の未来へ

4-1 再び「記録と記憶」

冒頭で紹介した二〇〇四年展示会の「記録と記憶」というタイトルは資料（記録）を介した記憶の「共有」を端的に示しており、今から考えても含蓄の深いものである。しかし、さらに掘り下げて考えるならば、そのことの本当の意味は未だに理解しあぐねるようなにも思われる。記録を残すこと、記憶を伝えることの意味を問うならば、それはある種の紋切り型としてしばしば用いられる「記憶を風化させない」ということだけではないと思う。このことばからは、何か脱け落ちてしまっているものがあるのではないだろうか。

筆者（益本——九州の出身で、二〇〇四年に神戸大学に入学し、中越地震のボランティアを経験している）は時に、「記憶を風化させない」という言葉の受け取り手として、極端な二様の人を想像してしまう。一方は、震災を知っているが関心のない人たちで、もう一方は、震災を忘れたくても忘れられない人たちだ。

震災を知っているが関心のない人たちの気持ちは、わかる気がする。というのも、筆者は被災者ではなく、大学時代を神戸で過ごすことがなければ、震災のことを気にすることもなかっただろうから。神戸に来るまで、筆者にとって「震災」は、小さい頃ブラウン管を通して知ったどこか遠くの重大事件でしかなかった。

一方、家族を亡くし、住む場所を変えるなど、少なくとも人たちの生活が震災で一変した。そういった変化に見舞われた人の中には、震災を何らかの形で今も引きずっている人がある。復興公営住宅で暮らしているお年寄りの生活などは、その生活自体が文字通り震災の延長線上にあると言える。あるいは、そういった明白な形でなくとも、筆者の比較的



現在の震災文庫

身近な範囲でも、震災の番組を見ると当時を思い出して泣いてしまう人や、「他の被災地の支援をしたい気持ちはあるが、被災地には行けない」と言う人、本棚を背の高さ以上にすることができない人など、さまざまな人たちがいる。「震災の記憶を風化させない」という言葉に対して、震災を経験し、それを忘れたくとも忘れられない人たちは、何を思うのだろうか。

ある中越地震の支援者は中越の地震から五回程経ったある頃、被災者から「いつまで地震のことを言ってるんだ」と言われたそうだ。「記憶の風化」に抗する言葉ばかりが先行してしまうことは、時によいことではないのかもしれない。

「被災者」とひとことで言うが、決して一様なものではない。それぞれのの人に多様な震災体験があり、また決して一筋縄では捉えられない、本人にすら表わせないかも知れない、その後の生活とその中で生まれてきた想いがあるのだ。震災について記録を残し、語り伝える行為を、

「防災教育のため」や「記憶を風化させないため」という目的に単純化してしまったのでは、受け取り手の、受け取るという行為を最初から受動的にし、何か一方通行的なものに狭めてしまうのではないだろうか。

4-2 結語

以上、一五年目を迎えた震災文庫について、活動の一端に関わる筆者達の個人的な想いを含めて記してきた。これまでも節目節目で震災文庫の活動について紹介や

報告が行われてきたが、「迷い」ともいえる部分も含めてこれほど個人的な想いを前面に出した文章は初めてである。いささか客観性を欠いているかもしれないが、「震災を後世に伝える」「次の災害への対応や防災に役立てる」といった一見分かりやすい「目的」に安住せず、時には立ち止まって問い直すことがむしろ「継続」につながると考えた結果である。

図書館司書としての筆者達にできることは、集まった資料に無理に方向づけを与えず、受け取り方の自由を制限しないこと、そして普段からの広報、展示会、発表・講演といったできるだけ多くのチャネルを使って資料の存在を知らせ、震災文庫の未来の利用者の出現をうながすこと、それによつて記憶を未来へつなげて行くことだと、ひとまず結論づけることは許されないだろうか。

【注】

- (1) 書籍としては稲葉（二〇〇五）、雑誌記事としては渡邊（二〇〇五）などがある。くわしくは「震災文庫に関する資料・論文の一覧」を参照 http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/on_eqb.html
- (2) 二―四節はそれぞれ順に渡邊、中山、益本が主に執筆し、中山が全体を調整した上で、全員で確認を行った。
- (3) 展示会は震災一五周年を前にした二〇〇九年にも行っている。こちらは合同資料展「資料が語る 阪神・淡路大震災の記憶と現在（いま）」と題し、阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センターとの共催による合同資料展で、同センターの会場でも同時開催された。
- (4) 例えば東京朝日新聞 一九二四年三月二日「小運送制度現状調査要目」<http://bit.ly/aEKU2R>（リンク先は「新聞記事文庫デジタルアーカイブ」<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/>内）
- (5) 例えば大阪毎日新聞 一九三三年一〇月一日「国民の経済力に立脚した復興策を採れ」<http://bit.ly/cILZI>（同）
- (6) 谷氏による写真・動画は震災文庫のデジタルギャラリーでウェブ公開されていゝ。(<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/dlib/>)

- (7) 寺田(一九九七)の「体験した揺れが歴史的イベントである意識」(三三頁)という表現は、まさにこのようなことを指すのだと思う。
- (8) 寺田(二〇〇五)の表現によればこれは「分有」ということになるのか。「分有とは「…」記憶が個々人に別れてしか存在しないことを前提とした上で、しかし人が人とともに暮らしていくためにそれとともに分かち持つための形態のことを指す言葉である。」(一九頁)

【文献】

- 寺田匡宏(一九九七)「復興と歴史意識…阪神大震災記録保存運動の現在」『歴史学研究』七〇一、三一一―四一頁、青木書店
- 寺田匡宏(二〇〇五)「ミュージアムの可能性のために…一九九五年を起点として、『過去』と『記憶』と『歴史』の表現をめぐって」『someday, for somebody: いつかの、だれかに…阪神大震災・記憶の(分有)のためのミュージアム構想一展』、「記憶・歴史・表現」フォーラム(震災文庫デジタルアーカイブ内 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/> より閲覧可能 <http://bit.ly/997r0b>)
- 稲葉洋子(二〇〇五)『阪神・淡路大震災と図書館活動…神戸大学「震災文庫」の挑戦』西日本出版社
- 渡邊隆弘(二〇〇五)「震災記録を収集・保存し、将来に役立てる…神戸大学「震災文庫」の一〇年」『図書館界』五七(二)、七三―七七頁、日本図書館研究会(震災文庫デジタルアーカイブ内 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/> より閲覧可能 <http://bit.ly/9eFhTO>)